

巻頭言

2025年問題

病院長 棚橋 忍

高山赤十字病院紀要37号を発刊いたします。病院が発行するジャーナルは病院の医療の質を問うものでもあり、また若い医師、医療スタッフの論文作成の訓練の場でもあります。今回は研修医・若手医師の原著論文が少なく寂しい感じがします。一方、他の医療スタッフの論文が投稿されており、人材育成に寄与するものと期待しています。

平成26年4月に診療報酬改定がありました。全体では0.1%のプラス改定ですが、この中には消費税が5%から8%になった相当分の1.36%が中に含まれており、実質的にはマイナス1.26%の改定になります。来年には消費税が10%になり、経営的には更に困難なものになると感じています。今回の改定の目玉は何と言っても7：1看護にかかわる看護必要度の見直しとそれと連動した地域包括ケア病棟の新設です。この改革は増えすぎた7：1病床を減らし回復期病棟、地域包括病棟への転換を誘導することが目的です。医療資源が乏しく、少子高齢化に伴う人口減にあえぐ地域にある当院は重症患者が急増加することは考えられないため、回復期を含めた亜急性期病棟をどのように考えていくか大切です。病床機能の変更は簡単な事ではないと思いますが、なんとか職員の知恵を結集し事に当たっていかなくてはなりません。

一方、前回（2012年）、今回の改定は2025年に団塊の世代が後期高齢者になる事を念頭に、我が国の持続可能な医療提供体制を維持するために厚労省が推進している工程に沿ったものである事は明らかです。2025年問題のキーワードは、医療機関の機能分化、病診連携、在宅医療と考えています。今後、当院は地域医療連携病院として地域の医療機関、介護・福祉、行政と連携を今以上に深め、急性期医療の維持・充実をめざしていかなくてはならないと思います。

本年は1年目の研修医が7名で、そのうち岐阜大学医学部地域枠の医師が4名含まれています。今後の医師確保にやっと光が差してきたようにも感じています。彼らが岐阜県の医師になり、さらに地域の医師になり、活躍してくれることを期待したい。

